博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査）　加藤　晴子

学位申請者　崔 婷

論　文　名　汉语动结式与受事前置现象的句法语义分析

【審査の結果】

崔婷氏から提出された博士学位請求論文「汉语动结式与受事前置现象的句法语义分析」（邦訳「中国語結果補語文における目的語前置現象の意味と構文」）について、論文審査と口述による最終試験の結果、審査委員会は全員一致で、崔婷氏に博士（学術）の学位を授与するのが適当であると判断した。

公開審査（最終試験）は、2017年（平成29年）8月17日（木）14:20から15:50まで、本学中会議室で実施された。本論文は中国語で執筆されているが、崔婷氏の希望により、公開審査は日本語で行われた。最初に崔婷氏より提出論文の概要について説明があり、その後、各審査委員が講評を行うとともに崔婷氏との間で質疑応答を行った。最後に主査から講評の総括がなされ、今後の研究課題及び方向性が示された。

審査委員会は、加藤晴子が主査をつとめ、本学の三宅登之教授・望月圭子教授・谷口龍子准教授、学外からお招きした石村広教授（中央大学教授・中国語学）を副査とする5名で構成された。

【論文の概要】

本論文は、中国語の動詞が結果補語を伴った動補構造（以下では、当該の動補構造が述語になる文という意味で「結果補語文」と称する）とともに動作の対象を表す目的語が生起する場合、それが統語上動補構造の前に位置する現象に着目し、コーパスの実例に対する実証的な分析を通じて、この現象の統語的制約と意味論的な動機づけを解明したものである。

中国語の結果補語文は、動作とその結果という時間軸上で連続する因果関係で結ばれた２つの事象を表す。中でも本論文で考察の対象となっているのは、動作主が対象に働きかけ、その結果対象が変化し、最終的にある状態になるという他動的な事態である。動作主を主語に、対象を目的語に置いた一般的な動詞述語文の語順に対して、動作主は言語化せずに対象を主語に置いたものが、本論文で主要な考察対象となる目的語前置現象である（な

お、本論文で言う目的語前置現象には主題化構文は含まれない）。

本論文は、中国語の結果補語文における目的語前置現象を、影山（1996）によって提唱された「脱使役化」（decausativization）の理論のもとで考察する。目的語前置現象が成立しやすくなる要因について、対象の状態変化の類型、状態変化への動作主の関与の程度等の独自の基準点を設定し、コーパスから収集した大量の言語データを緻密に分析し、その統語的制約と意味論的な動機づけを解明している。

本論文の構成は以下の通りである。（なお、本論文原文は中国語であるが、以下の章のタイトルはその日本語訳で示す。）

第一章「序論」では、本論文で研究対象とする結果補語文における目的語前置現象について、先行研究に基づいて概略を示し、本論文で解決すべき課題を挙げている。また、収集した言語データに関する情報を説明している。

第二章「本論文の基本構想」では、主に本論文での理論的枠組みとして用いる影山（1996）の「脱使役化」を解説し、結果補語文における目的語前置現象の成立する要因として動作主の背景化が大きく関わっていることを述べる。アスペクトの観点から分析すると、結果補語文のうち限界性（telicity）を表す結果補語によって結果状態が前景化され、動作の過程は背景化されて動作主が言語化されないことが、目的語前置現象が生じる大きな要因になっていると考えられるが、一方では動作主が発した動作に焦点が当たるために目的語前置現象が起こらず、“被”等の受身マーカーが付加される場合もあることを述べ、事象への動作主の関与の程度が目的語前置現象の成立の可否と関連するという本論文での分析の方向性を示している。

第三章「結果補語文における主題役割及びその状態変化」では、結果補語文における主題役割の状態変化のタイプを検討し、目的語前置現象が起こりやすいタイプとその要因を検討している。サンプルとして146例の結果補語文における目的語前置現象の分布状況を収集・分析した結果、状態変化のタイプによって目的語前置現象の成立のしやすさに一定の傾向が認められることを明らかにしている。判明した大きな特徴として、何らかの完成品や新たな状態が出現する「出現タイプ」では、目的語前置現象が多く起きており、一方、物が消失したり機能を喪失したりする「消失タイプ」では、受身表現が多く用いられるということが挙げられる。道具を用いることが含意される作成動詞においても英語と異なり中国語では目的語前置現象が多くなることも合わせて考えると、中国語では、事象へ動作主が関与する程度が大きくても、そのことによって動作主の背景化が阻止されるわけではないと言える。むしろ逆に、中国語においては「出現タイプ」の事象では動作主が背景化され目的語前置現象が多くなることがデータで示されており、これは事象が完了した際に対象の結果状態の方が重視されるという中国語の性質が言語事実に反映された結果であると主張されている。

第四章「動作主の関与の程度とアスペクト的特徴」では、変化事象への動作主の関与と

動作主の背景化の程度を、アスペクトの面から定量的な分析を行い検証している。結果補語文の表す変化事象を、動作主の関与の程度に基づき、動作主が最後まで関与する「動作主主導タイプ」、基本的には動作主が主導するものの対象の性質も関与する「対象介入タイプ」、対象の内在的性質によって実現する「対象主導タイプ」の３つのタイプに分けている。語彙概念構造に基づく動作主背景化の原則が中国語の言語事実に合致するかどうか、本章では178例の結果補語文のサンプルを元に５つのテスト項目を設定し、事象のアスペクト的特徴を計量的に分析している。その結果、瞬間的事象を表す「対象介入タイプ」では動作主の背景化は起こりにくいものの、本来背景化が起こりにくいはずの「動作主主導タイプ」でも動作主の背景化が起きていることが判明した。実際のコーパスでは完成品等の新たな結果を生み出すものを典型とする「動作主主導タイプ」が多数を占め、しかもその場合は目的語前置現象が多く起きているというデータは、中国語が結果重視タイプの言語であるという先行研究の知見を言語事実から計量的にも実証している。

第五章「共起関係から見た目的語前置現象」では、文中の成分との共起関係が目的語前置現象の成立に与える影響を分析している。まず、単文の単位で共起成分を見た場合、動作主の意図や動作の様態を修飾する連用修飾語が共起すると、目的語前置現象が成立しにくい一方、道具・材料・方法手段を表す連用修飾語が共起している場合には、目的語前置現象は成立し、さらには変化後の結果状態を修飾する程度や数量を表す成分と共起する場合も、目的語前置現象は成立しやすいことが主張されている。次に、複文レベルで考察すると、原因節が複文の前半に置かれた場合には目的語前置現象が成立しやすいことが示され、結果補語が表す結果をもたらした原因が、原因節の部分で言語化されることがその要因になっている点とともに論証されている。

第六章「結果補語文の特例現象」では、結果補語文における周辺的な成員を取り上げ、分析を加えている。まず、第一動詞が“打”で構成される動補構造“打 V2”（“V2”は第二動詞を表す）における“打”が語彙的意味を失い抽象化した行為しか表さない例を豊富な実例を挙げつつ詳細に分析している。次に、モデルケースとして動補構造“唱红”を取り上げ、“唱红”からなる結果補語文で目的語前置現象が起きるには場所項との共起が必要になるという条件を指摘し、その原因を“唱红”のアスペクト的特徴から明らかにしている。周辺的な成員として特に取り上げられた“打 V2”と“唱红”の共通点として、第一動詞がその語彙的な意味を失うことに伴い、動作主も背景化される点が、目的語前置現象が成立する要因となっていることを明らかにしている。

第七章「結論」では、本稿の主張がまとめられている。

【審査の概要と評価】

提出論文に対して高い評価を与えることができる点として、審査委員からは以下のような点が挙げられた。

(1) 研究テーマの設定に工夫がこらされており、著者自らがユニークな分析の基準を設定し、興味深い指摘を行っている。その結果、例えば動作主の背景化については、理論言語学の一般的な知見とは異なる点が中国語の言語事実には内包されていることが指摘されており、研究テーマや分析の基準の妥当性を示している。

(2) 時間をかけてコーパスから豊富な言語データを収集しかつ分析をしている力作である。その豊富な言語データを扱いつつ、同時に緻密な論旨の展開がなされており、言語事実をふまえたことによって自らの論旨展開に大きな説得力を持たせることに成功している。

(3) 結果補語を伴った動補構造については、既に多くの先行研究はあるものの、第一動詞の意味的な性質などの点において未だに意見の一致をみない点は多い。中でも、動作動詞の働きや動作主の事象への関わり方に焦点をあてるという手法での先行研究はほとんどないので、先行研究で未解決な問題に対して本論文は有益な回答を与えていると言える。

(4) 動補構造の語彙レベルの考察にとどまることなく、文中の他の要素との組み合わせで見るなど統語的なレベルからも分析し、さらに分析に際しては意味的な特徴も合わせて考察しており、中国語の結果補語文についての、従来とは異なった新たな視点を提起することに成功している。

(5) 中国語の結果補語文についての非常に豊富な実例を収集し、これまでにない独自の視点から分析・分類した本論文の言語データは、中国語学の分野で新たな知見を与えるのみならず、中国語教育の分野においても大きな貢献となりうると言える。

このような高い評価を受ける一方で、以下のようないくつかの疑問点や解決すべき課題も提示された。

(1) 本論文は主に影山（1996）の語彙概念構造に基づく脱使役化を理論的ベースとしているが、その理論をより深く全面的に理解し自説に応用することが求められる。本論文の結論からは、影山の日本語と英語の対照分析の理論が、中国語学の中で十分に消化されているかという点で若干の疑問が残る部分がある。この影山理論を始めとして、その他の代表的な先行研究はその論旨をより厳密に正確に引用し、自らの論旨に理論言語学の知見をより適切に活かすことが求められる。

(2) 豊富な言語データを挙げる一方で、論証のプロセスには工夫の余地が認められる。論旨展開としては、出現タイプと消失タイプ、瞬間性と持続性、動作主の関与等の自らが設定した対立項の境界線が、より一層明確になることが望ましい。それらがはっきりした上で、目的語前置現象の成立可否と一致するのかが検討されてもよい。これらの対立項に基づく結果補語文の分類の曖昧性をさけるためには、統語的な根拠をはっきり示すべきであろう。

(3) 一般的に中国語で目的語前置と言う場合、必ずしもそれが文頭に置かれるとは限らず、統語的には主語と述語動詞の間など他の語順もありうる。目的語前置と言うタームを用い

る以上は、まず中国語でありうるケースを全て示した上で、本論文での考察対象を限定し厳密に定義付ける必要がある。

(4) 本論文はデータとしてコーパスを使用しているので、目的語前置現象の規則性を言語使用のレベルから見ていることになる。目的語前置現象には、前後の文脈や結束性の影響など談話レベルでの要因が関係していることが予想されるが、今回の分析ではそのようなコーパスからの示唆をあまり考察対象に取り入れていなかったようなので、今後の課題としてそれらの点も考察対象に取り入れることが望ましい。

最終試験では、以上のような疑問点や課題も提示されたが、崔婷氏は指摘された課題やアドバイスに真摯に応答し、本論文の問題点や課題について十分自覚していることが確認できた。また、審査において指摘された疑問点や要望は、本論文の研究成果や学術的価値を高く評価した上で、研究をさらにブラッシュアップし深めるべく提示されたものであり、本論文の意義を大きく損ねるものではないことは、審査委員の共通了解である。

審査委員会は、最終試験をふまえて、本学位請求論文が博士の学位にふさわしい重要な研究成果であると判断した。

以上により、審査委員会は全員一致で、この業績をもって崔婷氏に博士（学術）の学位を授与することが適切であるという結論に至った。